



路政春秋

足に行くにまかせて

「足」「足」「足」の行くにまかせて夕暮れ
 迫る街路を漂浪して行く。一步々々鋪装の
 感觸にも夏の氣分を感じながら。とある街
 路樹の茂の下に足を止めた、木の間を通し
 て空を仰げば煙草の煙りのたち昇つたるか
 と思はるゝ様な雲が去來して居る、雲の絶
 へ間ははてしもない蒼穹である。われ五尺
 の身を以て此無限の宇宙に在る、何をか値
 するものぞと自らを省みると同時に足の靴
 先をながめた。其處には粗末な歩道のプロ
 ックが仲間はずれをして醜姿を現はして
 居る。新聞紙の切れがそよ風に吹かれて居
 る、痰唾が處かまわずはき散らされて居る、

きたなきはんかち一ふが落ちて居る之れで
 も帝都の街路かと嘆息するや否「ヤーケン
 ノンだ氣をつけろ」と叫ぶ聲がする、目を
 あげると一尺足らずの處に自轉車がとまつ
 て居る。轍の跡に目を馳せて見ると歩道を、
 安全なるべきウオークサイドを交通巡查の
 不在につけ込んで疾走し來つたものと見へ
 る、大地に足をつけよと言はるゝが大地に
 も斯る危険が存在する。

目あるものゝ惱み

目は口程にものを言ひ得るや否は知る人
 の外知り得ないと思はるゝが視ゆる目を具
 へて居る我々は街路のそよ歩きにも視ざら
 んとしても視せらるゝものが少なくないが

注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安
 と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざ
 る限り奇想天外的の寄稿を望む、一文
 は四百字位にて取捨は編輯子に一任、
 原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

事の餘りに醜姿を現はして居るものは、
 太陽熱の爲めに路面鋪装のアスファルトが
 ブク／＼と沸き上ること、ハイヒールのハ
 イカラ娘さん達を惱ますことの如何に多き
 ことか、ヤレ下水布設、ヤレ電纜の埋設、
 ヤレ上下水道管の取換、ヤレ瓦斯管の修理、
 などと折角鋪装を終了したかと思つとすぐ
 後から後から掘返す。道路に對する慘澹た
 る取扱振り、歩道はさらでだに狭きを感じ
 る、電柱や郵便函や植木や街路樹や日除け
 やみかん箱のつみかさねなどで、リヤカー
 ーや自轉車乗りの歩道との無作法振り、黴
 毒患者や不具者や乞食などが路傍に其の醜
 き手足をことさらにさらけ出して居る態
 様、表通りの壯麗な建築物の立並ぶ裏側の

小汚なき小屋掛け、塵芥箱の並列など思はず視ゆる目を閉ぢなければならぬのは都會生活者の大なる悩みである。

耳ある者の苦しみ

水車の音、せまらぎの水のひびき、山里の曉鶉の聲にならされた耳は都に出て、暫らくは辨せんばかりに街の雑音に苦しめられたが、都なれのした今日では、而かも警察の方面で先年雑音ハオートベイヤ、諸車の警笛を制止せられたので心しづかなるを得たが、朝の散歩に宿を立ち出て大街道筋に一步を踏み入ると其處には電車の軋る音、オートベイヤトラツクの機音や交叉地點でのコラツとの交通巡查の叱言等街頭の混雑した音は勿論鐵骨構造物の工作の大音響、卑俗極まる民謡のレコードの聲など耳ある者の苦しみは到底神經を刺戟せずにはおられない、都會生活も悩ましきかなである。

法螺も吹き様で

罪となる

新潟縣下の某部落では法螺貝を吹き立つると一同か野良仕事を休む習慣がある。夫れで日中法螺貝が吹かるゝと田に在るものは鎌をかつき、土手に在るものは鎌を手にし、山に在るものは手斧を肩にして家路につくのである。處が過般の衆議院議員の選挙に際し或日推薦演説會があつた。忽ち村道の彼處此處で法螺が吹かれたので野良仕事を中止して家に歸へつたものはつれづれの時を利用して先に棄権者は非國民の如く教へられておるので、已むなく投票に出掛けた。之れを知つた警察官は演説會の聴衆狩出しの新戦術なりと認め無資格の選挙運動として其の法螺吹き男は検事局送りとなつたと。法螺も吹き方では罪となるかと驚かされた。

村債はものかは橋を

造るべきか

一昔半の或貞に「溪流游浚夏は香魚の縦横に游泳するを覗ひ、冬は水禽の淵に浮むを望む山紫水明の境とだに聞けば、自ら塵外の感を覺ゆれども、瀬となり、淵となるを繰り返して流れるので舟行がきかない大抵は左に折れ、右に曲り谿に浴ふて村落をなすから。一村に三つも四つも架橋を要する。道路のやうな廣汎なる生産助勢の設備は思ひ切つて借金支辨で勇猛に進行して可然ものと思ふとの一文があるのを見る。時代は變遷した、演習の爲めの實彈の數個の費用で立派な山里の橋梁架設費は十分であるなどと論じては相成らない。況んや八億でも九億でも赤字公債を發行しなければならぬ現狀である。五千萬圓も六千萬圓も金の現送をしなければならぬ時勢である。非常時局の克服は山河を跋涉して陸稻や粟稗の生活を増加するの外なしと謂ふべきか。

ありやなしやの珍聞

奇譚 (3)

○お伊勢詣りの變遷、大阪からの道は長谷から青トネルを越えて松阪に入る「青越え」と生駒から暗峠、奈良、伊賀上野を経て龜山に入る、暗がり越えの二つだった。楠ひの三度笠に手甲、脚絆をつけ、團體名を書き印した大幟を押し立て、「ヤートコセ」の音頭も賑々しく神都へ繰り込んだもので日数は七日餘りもかゝつたとの事である。明治四年頃までは僧侶は宇治橋が渡れぬ規則があつたので、強ゐて渡るにはボチカツラで丸頭を偽装したものだ。くりくり小坊主には恰好のカツラがないため白髪カツラを被つて難關を突破したと云ふ笑へぬナンセンスもあつたことだ。其頃神主達の經營する旅館があつて、こゝに泊つた客は太夫つきといつて太夫神樂を見せてもらった。三社詣りといふのはお伊勢様に詣れば必ず京都の石清水八幡宮、奈良の春日神社に參詣することになつて居つたが、今では住吉神社へだけ參詣すれば三社詣りをしたと同様だといはれるが今は見られない。

最後に伊勢參宮だけにいひ殘されてゐるのぬけ詣りと云ふのがある。これは無斷參宮で大阪の商家などで番頭や若い者達が取立に出かけ參宮反達を談らひ、其取立金を旅費として參宮し、玉造りまで歸ると直に主家に事情を打ちあけて詫びの使を立てると主人側では他の事とは違ひ、お伊勢詣りだと云ふので怒らぬどころか却つて酒肴を重箱に詰めて町内の人々が先頭に立つて賑々しく迎ひに行つたものだとあにち會長木下氏が話して居る。昔にかわる電車汽車ベスの伊勢詣り委託金費消罪に問はれて變りも變つた伊勢詣り。

道路問題も斯うして 呼びかけよ

大朝社主催で名古屋市中で道路問題大講演會を開催され下の如き講演があつた。

一、東西大都市と名古屋の道路

大阪市土木部長 福田 並喜氏

一、名古屋市道路の現状と批判

内務技監

辰馬 謙藏氏

一、道路美化の必要性

京都帝大教授

近藤 泰夫氏

一、道路計畫の將來

名古屋市土木部長

花井又太郎氏

一、都市計畫の觀點より

東京市土木局長

衣斐 清香氏

之は東京大阪兩道路研究會が聯合大會を開き觀光道路の視察をも爲し道路の愛護美化の民衆運動を喚起する目的に出たもので其の大會に參加したる諸大家は、工學博士牧彦七、内務省土木試驗場長藤井眞透、内務投師金森誠之、同顧問清水照、京都帝鐵道部長橋本敬之、同顧問清水照、京都帝大名警教授田邊朔郎、同武井高四郎、京都市土木局長高泉景、大阪帝大南大路講一、愛知縣土木部長山口十一郎、内務省名古屋土木出張所長金古久次、名古屋高工教授北澤忠男、同大崎虎二、名古屋鐵道技術部長永田民也の諸氏であつた。斯うして機會を逃さず活動することが喫緊事である。